

戦争の記憶

根本 新作さん（昭和15年生まれ）

東京大空襲

私は昭和15年11月30日生まれです。昭和20年私は5歳。私にとって忘れられない記憶があります。それは昭和20年3月9日の東京大空襲です。米国のB29爆撃機が焼夷弾という爆弾を東京の街に落とし、東京を火の海にしたのです。これは後で父親から聞いて分かりました。この夜騒ぎで目が覚めた私は、大人達が話をしながら見ている西の空を見ると、空一面が真っ赤になり、空が燃えているようでした。幼い私は恐ろしくなりました。次の日の朝黒く焼けた紙屑が降っていました。東京ではこの夜大勢の人々が亡くなったと後で聞かされました。

入隊への挨拶と見送り

年度は幼かったため分かりませんが、ある朝Nさんのお父さんが兵隊に入隊することになり家に挨拶に来られました。母に挨拶をした後、私に大きくなったら兵隊さんになりなさいと言っていました。それから何日か後の事。兵隊に入隊するSさんのお兄さんの乗った汽車が来るので踏切付近に集落の人と見送りをする為待機していました。まもなく汽車は来てSさんのお兄さんは走っている汽車の窓から顔を出しかぶっていた帽子を手に振っていたが何かの拍子に帽子が手から離れ落ちてしまったのです。その後Nさんのお父さんもSさんのお兄さんも戦死されたことを聞きました。

空襲警報

戦争中、兵隊さんがよく高倉集落に来て防空壕を掘ってくれていたのが記憶にあります。昭和20年になり、空襲警報が多くなったと親から聞いたことがあります。その頃は集落の中央に半鐘が吊るされていました。半鐘が鳴ると空襲警報で母親に連れられ、近所の防空壕に入りました。隣近所の人と一緒に入るので子供の私は楽しかったです。その頃は敵の戦闘機から身を守る為防空壕によく入りました。敵の戦闘機がどんなに危険か私にはよくわかりませんでした。

（原文のまま掲載しています）